

## 共生社会に向けて

後藤邦夫

元人間総合科学研究科(体育科学系)教授  
(ごとう くにょ／障害者スポーツ)

障害あるいは疾病の回復期にある人たちに身体活動が良いとされ、紀元前から実践されてきた。中国では「庚復」と呼ばれ、インドでは「ヨーガ」として現在でも道場や教室が開催されている。近代スポーツを治療として用いた人としてグットマンが有名である。グットマンはポーランド系ユダヤ人で、ドイツで医学を学び、ドイツのユダヤ人病院の院長として治療に携わっていたが、ナチスの迫害に遭い、イギリスに亡命する。ロンドン郊外アイルズベリーにあるストック・マンデビル病院の整形外科医長として迎えられ、そこで脊椎損傷者に対して、新たな治療を始める。

それまで、脊椎損傷者はコルセットで身体を固定され、ただ静養している状態におかれ、そのため辱瘡に苦しみ、尿毒症で受傷後早期に命を落とす人が多かったといわれる。グットマンはコルセットをはずし、数時間毎に身体の向きを変えらることによって滞りがちな箇所の血流を良くし、身体を清潔に保ち辱瘡を防止すると共に、排尿時

に雑菌が身体に進入しないよう処置を施した結果、それまでの脊椎損傷患者の平均的な死亡率を70%減少させるという驚異的な治療効果を示した。彼は更にスポーツの持つ向上心の育成、娯楽性、身体活動性に着目し、リハビリテーションの一環としてスポーツを導入し、楽しみながら明確な目標を持つことによって社会の中で生きていく自信と身体機能の回復を図ることに成功した。グットマンが開催した病院内のスポーツ大会はやがてヨーロッパに広がり、大きなスポーツイベントとなった。スポーツ大会は病院外からサポーターやボランティアを招き入れ、病院が発刊する機関紙「コード」にスポーツ記事を発表することによって、何もできないと思われていた脊椎損傷者に対する正しい理解と啓発を、社会に対して発信していった。大会を継続していく中で、グットマンは競技スポーツとして障害のある人のスポーツの価値にも気づき、特にアーチェリーの分野で障害の無い人の大会に積極的に選手を出場させている。

1960年、グットマンは障害のある人のスポーツの更なる発展を求めて、オリンピック会場における大会開催を企画し、ローマオリンピック後にその大会は実現した。その大会はパラリンピックとして位置づけられ現在に至っている。障害のある人のスポーツは、競技性が一段と向上し、陸上競技、水泳や馬術、フェンシングなど、オリンピックや世界選手権でメダルを獲得するアスリートも現れ、トップアスリートの世界の一部では障害のある人と無い人の共生が進んでいる。

この一般的なスポーツの他に、障害のある人固有のスポーツとみなされてきたシッティングバレー、ブラインドサッカー、車椅子バスケットボールのように、最近では一定の条件を満たすことによって障害の無い選手と障害のある選手が混在して共にプレーをする競技も生まれ、スポーツの上での『共生社会』は更に進んできている。こうした競技力の『差異』の存在を認めたくえで共に活動するための工夫や知恵をこらしたスポーツの振興は、プレーに関わる人たちに『共生社会』の基礎となる土壌を培い、近未来の社会のあるべき姿の構築に貢献するであろう。一例を挙げれば、先天性四肢切断症の乙竹氏の著書「五体不満足」では、子どものころ遊んだ野球で、差異を差異として受け止め、それを克服した形で「共に

遊ぶルール」を作り出し楽しんだという件にそれを見いだすことができる。

現代社会は、思想的な対立、経済的な対立、自然環境との対立他、世界中に対立が山積し、深刻な問題を提起しており、その結果人間や動物、植物の生存権が奪われ、「絶滅種」と哀しい名前と呼ばれる種が生み出されたり、本来生存が不可能であった地域に突然新たに植物が生息し始め、生態系を破壊したり、地球の未来に暗澹たる影を投げかけている。今、人とのあるいは自然との『共生』を生み出す知識と技術と態度の育成は人類の急務で、人間のエゴや傲慢さを捨て、『我ら地球人』として世界が手を取り合って真剣に地球の未来を考え、行動をしていかないと取り返しのつかないことになりかねない危機的な状況にある。

そのような時代だからこそ、「勝つ・負ける」「メダルの色」もスポーツの大事な分野であろうが、共生社会に向けて『共に楽しむ』ことを目指したスポーツの価値の大きな存在に気づく時ではないだろうか。幼い時から、個人個人が共生という考えを持っている社会は、たぶん、電車で優先席など設けなくてもよい社会であろうし、ことさらユニバーサルデザインなどと声高に語らなくても良い社会であろう。共生社会を目指す教育・研究の一層の発展を本学に期待したい。